

「君と僕が有る意味は一言」

日付 2024/07/05

草稿のバージョン: 1.80

作者名: ぬぬぬへ

登場人物表

新田 (17) 1..美術部。2..虫が好き。3..一戸の友達。4..
ヘラヘラしている。5..いじめられている。
一戸 (17) 1..美術部。2..居場所がない。3..精神的な悩み
を抱える。
先生 (38) 1..高校教師。2..陽気。

クラスメイトA (17) 1..自分が優位に立つために人をいじめる。
クラスメイトB (17) 1..誰かと一緒に人を乏しめることが好き。
新田母 (37) 1..新田の母。2..樂觀的な性格。
新田父 (40) 1..新田の父。2..感情が制御できない。
ラジオのMC 1..とても陽気な地方FMラジオのMC。

放課後の教室には吹奏楽の音色だけが微かに響く。

クラスメイトA 「お前ってメイクとか疎いだろ」

新田 「うーん、したことないなあ」

クラスメイトB 「だよなあ、じゃねえとこんなならないだろ」

クラスメイト、新田のバッグを漁る。

クラスメイトA 「丁度いいや、カッコよくしてやるよ」

新田 「まじで？嬉しいわ。なにする」

クラスメイトA、勢いよく新田の顔に絵具を塗る。

クラスメイトB、踏みつぶした絵具を新田に投げる。

クラスメイトB 「お前いつも空気読めないよな。いい加減気付けよ、おもんないわ」

新田のバッグに入っている雑誌に絵の具を塗る。

クラスメイトA （笑いながら）「おい、やりすぎだろ」

クラスメイトB 「お前のほうがやってんだろ。でもさ、あの顔見ろよ、お前美術のセンスあるよ」

クラスメイトAとクラスメイトB、笑いながら教室から出ていく。

新田、散らばった絵具や筆を拾う。

新田 「……」

新田、バッグを肩に提げ教室を出る。

× × ×

美術室にいる一戸、ペットボトルを取り出し、菓を飲む。

× × ×

新田、顔を洗う。

2. 【学校 美術室(晴)】昼過ぎ 内

描いた湖の絵や風景画、画材などが乱雑に置かれていた。

新田、美術室に入る。

「わるい、遅れた」

「……………」

「ごめんって一戸、無視はどうなん？」

「……………」

「おいおいおい、またイヤホンしながら描いてんのかよ。それ校則違反だろ」

新田、一戸のイヤホンをそっと外す。

「気にしてないよ」

「もうそこまで描いてんのか、はやいなあ」

「見せられるレベルじゃないよ。センスないし」

「じゃあ、いつ見せるんだよ」

「いつなんだろうね。僕もわかんないや」

「単純にやる気ないだけだろ」

「……………」

× × ×

新田は黙々と絵を描き続け、風景画を様々なコンテストに応募していく。

一戸、描き悩み美術室に來ない日が増える。

壁掛けの日めくりカレンダーは薄くなつていく。

× × ×

「あいつ最近何やってんのかな」

先生、美術室の扉をガラガラと開ける。

「新田あ、コンテストの結果出てるぞ」

先生、一戸と新田宛ての封筒を渡す。

「もうそんな時期だったんですね」

「あれ、一戸は？」

「最近来てないですよ。僕渡しておくので大丈夫です」

「そっかあ、助かるわ」

新田、封筒をまじまじと見つめる。

「一戸も出してたんだ」

新田、封筒を机に置き、筆を手取る。

学校を真上から照らしていた太陽がだんだんと木々の影に隠れていく。

太陽を追いかけけるように雨雲が学校を覆う。

「傘持ってきてねえよ……」

バッグに筆や絵具をしまい立ち上がる。

ガラガラガラガラッ

一戸、ずぶ濡れで美術室に入り椅子に座る。

「ずぶ濡れじゃねえか、お前も傘忘れたんだろ」

一戸、顔を拭う。

「ほら、タオル。そのままだったら風邪ひくぞ」

一戸 「ごめん……ごめん」

新田 「大丈夫だって、少し服乾かしてから帰ろうぜ、傘。パクってさ」

一戸 「新田は何してた」

新田 「俺は次のコンテストに向けて風景画描いてた……そういえば、お前もあのコンテストにエントリーしてたじゃんか。ほら、これ結果」

新田、一戸宛ての封筒を渡す。

一戸 「ありがとう」

一戸、封筒を開ける。

新田 「どうだった？」

一戸、【優秀賞】に入選したことを知らせる書類を出す。

新田 「すげえ、いいなあ。負けてられないな」

一戸 「特にそこまでのモノは描けてないよ」

新田 「じゃあ見せても問題ないよな」

一戸 「確かこれだったと思うんだけど」

一戸、作品置き場から緑や青がメインに塗られ、所々に白や黄が混じった快晴の田舎風景な絵を取り出す。

一戸 「どうかな？やっぱり何の変哲もない絵だし、あんまりピンとこないよね？」

新田 「でもさ、なんていうんだろう懐かしさっていうのかな、それがすごい好きだよ。お前の絵は特にその雰囲気出すのうまいし」

一戸 「そうかな」

新田、バッグから筆と絵具を取り出す。

一戸 「帰るんじゃないの？」

新田と一戸、傘を差しながら帰る。

新田 「雨ってなんで降っているか考えたことある？」

一戸 「水が蒸発して、とか大気がなんとか」

新田 「面白くないなあ。ほら、カエルとか魚が空から降ってくる話あっただろ。UFOとかのやつ。俺それなんじゃないかって考えてんだよね」

一戸 「フアフロッキーズ現象だよ。でも、雨もそれが原因って言い始めたら宇宙人は働きものですよ」

新田 「疲れた時は有ること無いこと言ってるくらいがちょうどいいって」

一戸 「今日全然筆進んでなかったけど」

新田 「それ言うか？あははは、きびしいな」

一戸 「あはは」

新田 「一戸と新田、横断歩道の前で立ち止まる。

「俺あっちだから、お疲れ。またな」

一戸、立ち止まる。

一戸 「もし、今ここで死にたいって言ったら信じる？手伝ってくれなんて言ったら新田は怒る？」

一戸、手が小刻みに震える。

一戸 「……………なあ」

新田 「いやだ、ごめん」

新田、一戸の前を通り過ぎようと足早になる。
一戸、震える手で新田の腕を掴む。

新田 「何だよ」

新田、掴まれている方の拳を固く握る。

新田 「嫌だっつってんだろ……聞こえなかったかよ」

落ちる雨がより一層強くなっていく。

一戸 「お前なら……」

一戸、大きく深呼吸する。

一戸 (小声) 「お前だもんな……」

一戸 (顔を手で拭いながら) 「馬鹿だな……」

新田 「そうかよ。早く帰るぞ」

一戸 (動こうとしない) 「……」

新田、一戸を突き放す。

一戸、傘とバッグを落とす。

新田 「いい加減にしてくれ……。お前に『死にたい』なんて言われた気持ち分かるか、分からないから好き勝手言ってるんだろ。もう勝手にどこにでも行けよ」

車がクラクションを鳴らす。

新田、横断歩道を渡っていく。

雨音と街の雑音が二人の声をかき消すように強まる。

一戸 「……」

4. 【自宅 玄関(雨)】夜 内

新田、玄関で靴を脱ぐ。

新田 「ただいま」

玄関に置かれた家族写真が目に残る。

新田母（37）が居間から迎える。

新田母 「おかえり。今日は随分遅かったね。どつか寄り道したでしょ！ いやあ、あんた髪びしょ濡れだよ」

新田 「……うめん」

新田母 「風邪ひかれたら困るんだから、早く風呂入つてよ」

新田 「父さんは」

新田母 「……知らないよ。そんないいから早くしなさい。いつものことですよ」

5. 【自宅 自室（雨）】夜内

新田、バスタオルを肩にかけたまま自室の扉を開ける。

新田 （小声で）「忘れてた」

新田 「聞いてくれよ、今日。友達と喧嘩したんだ、あいつが悪いのは分かってはいるんだけどさ。俺もなんか言葉選びのセンスが……」

新田、昆虫ゼリーを開け、ケースに入れる。

新田 「え？」

飼育ケースに動かないカブトムシがいる。

新田、カブトムシを拾い上げる。

新田 （小声で）「なんなんだよ……。まじで」

新田、頭を抱える。

新田 「くっそ、なんなんだよ」

新田母 「うるさいよ、時間考えなさい」

新田父、新田の部屋に入る。

新田 「父さん、あと少しで絵が完成するんだ。きつとコンテストでも賞取るからさ、見に来てよ」

新田父、話の途中で新田を叩く。

「……………うるさくしてごめんさい」

新田母、どたどたと階段を登る。

新田母 「もうやめなさい。あとちょっとでアンタ卒業なんだし、我慢できるでしょ」

「はい」

新田母 「分かっているんだったらこれ以上面倒なことしないで」

新田母、部屋から出ていく。

新田母 「なんで子供にてをあげるの！やめてっていったよね」

新田父、テーブルをガシャンと倒す。

新田母 「やめて、暴れないで」

新田、布団にくるまる。

新田 「俺のせいだ」

6.

【学校 美術室(晴)】昼内

ミンミンミン

「……………あつっ」

新田 「そういえばさ、昨日のテレビ見た？」

一戸 「なんかやってたっけ」

一戸 「真夏の心霊スペシャル」

新田 「俺ん家さ、リビングにしかテレビないんだよ」

一戸 「そっか」

一戸、筆を止め大きなキャンバスを立てかける。

新田 「どうしたんだよ」

一戸 「このさ、ここからここまでを僕が描くから、ここからここまで新田が描いてさ、合作しよう」

新田 「なんでだよ、まだ俺らこれ終わってないだろ」

新田、筆でトントんとキャンバスを叩く。

一戸 「俺が夏を描くから新田は春を描いてさ」

新田 「だから、なんで急にそんなこと言ってんだよ」

一戸 「いいだろ別に！ たまにはお前のことと思っても」

新田、上の空になる。

新田 「そっか、顔にでも出てた？」

一戸 「手に持つてるそれ、絵具じゃないよ」

新田 「え？」

新田、手に昆虫ゼリーを持ったまま驚く。

一戸 「気付かなかったんだ」

新田 「昨日、死んだんだよなあ。最近の癒しだったんだよ」

一戸 「新田のせいじゃないでしょ」

新田 「ここんところずつと絵描いてばっかりで構ってやれなかったから……余裕なかったんだよ。知ってるか虫が越せる季節の数。たった1つ。たったひとつだけですら俺は満足に過ごさせてあげられなかった。自然に生きてたらもっと生きてんだ」

一戸 「でもそれは新田のせいじゃないでしょ」

新田 「所詮虫だからなんて思ってたんだろ。あああ、そうだろうな。俺の親父もそうだった、息子一人を

満足に幸せにさせられなかった男が何言ってるんだって思ったよ。」

「違う、違うよ新田」

「何が違うんだよ」

「うまく言えない、けど良かったら。明日外に出かけようよ。おすすめの場所あるんだ」

「知らねえよ。勝手に行ってる」

♪

【バス 車内(晴)】昼 内

雨が上がり、カラッと晴れている。

新田と一戸、2人座席に座る。

新田、窓を開ける。

「めちゃくちゃ暑いな」

「夏だね…」

蝉の鳴き声が響く。

窓の外には牧場が広がる。

(新田、窓を指さしながら)「おい、めちゃくちゃ牛いるぞ」

「牛好きなの？」

「生き物全般って感じ。一戸は？」

「あんまり写真とか撮ったことない」

「今日たくさん撮ればいいよ」

新田、スマホで写真を撮る。

一戸、スマホを見つめる。

新田、一戸のスマホを覗く。

「お前もそのゲームやってるんだ」

「まあ、ぼちぼちだけど」

「いいじゃん。今度やろうぜ、部活前とか」

「……………」

バスのエンジンと風の音が二人を包む。

「……………はああ。夏の風って案外気持ちいいもんだよなあ。カラッとしててさ」

新田、窓の外を眺める。

「そうかな……………」

「このまま寝たらどこまで行くんだらうね」

「終点でしょ」

「もしかしたら違うところまで進んでいってさ、別のところに着いたりしないかな」

「難しいんじゃないかな」

「だよなあ」

「でも、それくらい心地良いね」

一戸、窓に挟まれた枯れ葉を外す。

新田、一戸の方を振り向く。

「よっし。ここから歩こっか」

「え？」

「こんなに天気いいのに外でないなんてもったいないだろ」

「うん」

ピーンポーン。

「すみません。おります」

新田、降車ボタンを押す。

新田、バスから降りる。

一戸、新田に連れられ降りる。

8

【畑横の歩道（晴）】昼外

新田と一戸、周りを見渡ししながら歩く。

「歩くの嫌いだっただけ？」

「別に」

「ならいいや。この景色も絵になりそうだよな」

「だよね」

「こうやって歩くと描きたい絵が増えてくよな」

「うん。知ってる」

太陽が一番高いところで止まり、二人を照らす。

「そういえばさ」

「なに？」

「俺達って美術部以外で会うことなかったよな」

「俺は知ってたよ。新田のこと……」

「え？どこだよ」

「いつも耳についてたよ。これ」

一戸、バッグから絵具を取り出す。

「まじかぁ、いつもしっかり落としてたはずなんだけどな」

新田、大きく深呼吸する。

「そういえばさ、この前はごめん。言い過ぎた俺」

（割り込むように）「あのさ……」

（言葉を飲み込む）「今日、楽しかったんだ」

新田

「だよな。お前がここしかないって言うんだから
珍しいよな、自分からなんて。でもさ、お前最近
……………」

一戸

「早く描きに行こう」
一戸、駆け足になる。

新田

「ちよつと……………」
新田、追いかける。

9

【湖(晴)】夕外

新田

「網持ってきたらよかった。なあ一戸、ほらあそ
こ、セミ三匹いる」

一戸

新田、一戸の顔を見る。
「…………集中したいんだ」
一戸、イヤホンをつけながら湖や周囲の木々
を眺めている。

新田

「すまん、すまん。俺も集中するわ」
新田と一戸、絵を描いている。
× × ×

新田、立ち上がり虫を追いかける。
一戸、新田を横目で見ながら手を動かす。
× × ×

新田

水辺は少しずつ茜色に変わっていく。
新田、絵を描き終わる。
(伸びをしながら) 「終わった〜あああ疲れた」

新田、絵具などの画材を片付ける。

「一戸、できた？」

新田、一戸の絵を覗く。

「まだ全然……。新田は先に帰ってもいいよ？」

一戸の絵、ラフのみで描き終わってない。

「いやいやいや、明日また一緒に来たらいい。ただそれだけだろ？」

「（小声）今日じゃなきゃ……。今日じゃなきゃダメなんだ」

「明日雨でも降るっけ？」

「分かんないけど」

「じゃあ今日くらい帰ったって大丈夫だろ。この後一緒にご飯とか行こうぜ、おいしい中華料理屋見つけたんだよ」

「今日ここで描いていきたいんだ。ごめんな新田。今日描かなくちゃいつまたこの景色が描けるか分からないだろ」

「そうかもしれないけど……。ほらっ明日も晴れだって、今日より雲も少ないしきつともっと描きやすいよ。絶対俺も行くし明日にしよう」

「今日のこの思い出を描きたいんだ。分かるだろお前も絵描きなんだったら」

「知らねえよ。俺にとっては今日だろうが明日だろうと一緒に絵を描きに行くんだったら同じだ」
「そっか。たまには喧嘩もいいな、完成したら一番にお前に見せたいんだ。絶対連絡するから」

「お昼だって朝だって深夜にだっていつだっていいよ。できたら教えてくれよ」

新田、荷物をバッグに詰めて立ち上がる。

一戸 「最後にさ、公園の外まで見送らせてよ」

一戸と新田、公園内を歩く。

一戸 「新田の絵、俺は好きだよ」

新田 「お前まだ見てないだろ。まあいいわ、明日はギヤフンって言ってもらうし、じゃあな」

一戸 (割り込むように) 「あのさ、新田って絵を描けなくなったことある？」

新田 「おまえにそんな悩みを打ち明けられるなんてな。一つ言えるのは……そうだな、俺はいつもスランプだったこと」

一戸 「そっか……よかった。お前は頑張れよ」

新田、バッグを肩に提げて帰る。

一戸、新田に手を振る。

× × ×

新田、畑横の歩道を一人で歩いている。

プルルルル。(ワンコール)

新田、バッグから携帯を取り出す。

バッグから絵具を落とす。

新田 「え？あ、これ一戸に借りてたやつか。まあ明日でもいいや」

着信、「一戸」

新田、道を戻る。

× × ×

辺りは暗くなって静かになっている。

新田、歩いている。

新田 「一戸。一戸、いちのへ」

新田、キャンバスと一戸のバッグだけを見つ
ける。

一戸のキャンバスには完成された湖の絵が描
かれている。

新田
「なにやってんだよお前……わけわかんねえ
よ」

木には蟬の抜け殻が残っている。

公園は夕暮れに陰っていく。

10.

【学校 廊下(曇)】朝内

生徒が誰も居ない静かな廊下に外の部活動の
声がかすかに響いている。

11.

【学校 美術室(曇)】朝内

新田、筆洗で筆をバシャバシャと雑に洗う。

先生(38)が美術室に入る。

「おいおい、ここ蒸し暑いな」

先生、窓を開ける。

「やっぱりこの教室は窓開けた方がいいよ」

先生、一戸の絵にかけられた布を外す。

「これは……桑の花だね」

先生、腕組みをしながらまじまじと一戸の絵
を見つめる。

「きっとこれを描いた子は彼女のことが大好きだ
つたんだろうね」

「どうしてですか？」

新田

先生

先生

先生

先生

先生

「桑の花言葉がそんな意味なのさ。絵で表現するっていうのはかなり古臭いけど青春ってやつだよな。ハハハハ。はあ、思いだすなあ。ちよつと聞いてくれよ」

新田

「……………はい」

先生

「彼女いたんだ、俺。決して完ぺきとは言えないけどさ、かわいかったんだ。だけどいつか少しずつ気持ちちが離れてった。理由聞いたらなんて言っただと思う？」

新田

「飽きたとか？」

先生

「馬鹿、違うわ。俺は彼女にカッコよく思われたくて弱い人だってこと隠していたのが彼女は嫌だったんだと。訳分からなかったけど、きつと共有したかったんだろうな。お互いが弱かったってこととかさ」

新田

「そうかもしれないですね」

先生

「彼女はさ、強い人間じゃなかったんだ。先生よりも、別れた二か月後に自殺したよ。そのとき思ったんだ。ああ、俺のせいなんだなって、どこで間違えたんだろうなって……………この歳になってまだ人の愛し方分からないんだよな」

新田

「……………っはい」

新田、顔を拭う。

先生

「怖い話をしちゃったよな、すまん。まあ久しぶりに思いだした、いい絵描くよな、美術部は。期待してるよ新田」

先生、目を軽くこする。

先生、笑いながら歩いて出ていく。

先生

「そういえば、この時期は桑の実がなっているはずだけど。そこらへんもセンスなんだろうね」

先生、美術室から出る。

開いた窓から雨粒が入りカーテンを濡らす。

12. 【畑横の歩道（雨）】夕 外

新田、夕立に遭い一人急ぎ足で帰る。

13. 回想 【学校 美術室（曇）】夕 内

新田、スマホで『桑の花言葉』と検索をする。

新田、パンツとキャンバスを殴りつける。

14. 【畑横の歩道（雨）】夕 外

新田、涙を流しながら走る。

新田を襲う雨の勢いは強まる。

先生、車で通りかかる。

先生、窓を開けて顔を出す。

「何やってんだよ、新田」

「……」

「まあいいや。風邪ひかれても困るし、乗れよ」

15. 【車内（雨）】夕 内

新田、車の後部座席に座る。

「お前が傘忘れるなんてなあ。ハハハ」

先生、新田にタオルを渡す。

「……」

先生

新田

先生 「なんか好きな曲ある？まあ、洋楽しかないけど」

新田 「……」

先生 「さつき変なこと俺言ったかな？お前にもきつとセンスはあると思うぞ、気にすんな」

車内にはラジオMCの音声だけが流れる。

MC 「本日のテーマは『仲直り』。今回も頂いたお便りの中から読んでいきたいと思えます……」

先生 「（小声）空気読めよ」

先生、ラジオを止める。

先生、道路脇に車を止める。

車内は雨音とエンジン音で満ちている。

先生 「さつき歩いていたの家の方向と逆だったけど、どこか行きたいところあったら連れてくぞ」

新田 「……大丈夫です」

先生 「なんだよその顔。なんか話したいって顔してるけど……」

新田 「絵が描けなくなっただんです」

先生 「そりゃよくあることだろ。そういう時期だしさ、芸術なんてそんなすぐ出来るようなものでもないし。ほら、考え込むなよ俺にもそんな時期があった」

新田 「まだ大丈夫だって思って、俺の方がつらいと思つて、気付かなかった。俺のせいなんです」

先生 「それが言いたかっただけか」

新田 「そんなわけ……そんなわけないだろ。先生には分からないだろうけど、俺だって苦しかった。でも、なんとかやれていた。所詮俺の苦しみはそ

の程度だったって気づいた。俺があいつの苦しんでいることを見ようとしなかった。そんな自分がどうしようもなくダサくて、なんとかしたいけどどうしたらいいか分からない」

新田、顔をタオルで覆う。

新田、大きく深呼吸をする。

新田
「馬鹿ですよね、俺……すいません。忘れてください」

新田、タオルで顔を拭く。

エンジンの動く音だけが車内に流れる。

プルルルル プルルルル。

先生、電話を急いで切る。

先生
「そうだなあ。先生は全部を分かってあげられないな。だって俺でさえ言われないと、人の悩みなんてものは分かってあげられないんだから」

先生、小さな音量で洋楽を流す。

先生
「なんて言うんだろうな。前向いてさ。いつでも話くらいなら聞いてやるって気持ちで。俺で良かったら話くらいは聞いてやるからさ、それで気が晴れたらお前もそいつの話聞いてやったらいいんだ」

先生、車を前に動かす。

「それも青春ってやつだろ」

車は順調に走っていく。

外の雨は止んでいる。

「めっちゃカッコいいな、俺」

先生、ナビをつける。

先生
「ちよっと寄り道するぞ」

新田
先生

「どこですか」

「とっておきの秘密基地」

16. 【海辺（晴）】夕外

先生

「この景色、絵になりそうかな」

外は一面きれいなオレンジに光る砂浜、ザアザアと音を鳴らす夕暮れの海が広がっている。

「きれいです」

新田
先生

「そっか。学校なんてさ耐えたもん勝ちなんだよ、友達いなくても彼女いなくてもやりたいことがなくてもさ。嫌だったら逃げてもいいなんて人は言うけど俺は逃げてもいいことなんてないと思ってる。」

新田

「先生がそんなこと言うんですね」

先生

「言うさ、逃げたいやつが悪いことなんてないんだから。鷹に追いかけられたウサギは悪いか？悪いのは追いかけるやつだろ」

17.

【学校 美術室（晴）】朝内

新田

新田、使い古された赤絵具を取り出す。

新田、桑の未熟な赤い果実を描いている。

「一戸。お前になんて声をかけたら良かったのか。今は分かった気がするんだ」

× × ×

グラウンドではサッカー部や野球部などが大きな声を出しながら活動している。

× × ×

新田、赤を丁寧に塗る。

新田 (M)

「たった一言……。たった一言でもかけたらお前はなにをしていたんだろうな」

18. 回想 【一戸との思い出】

新田と一戸の日常の中で起きていた、気付けるはずの一戸からの SOS とも捉えられるサイン、新田は今までのその記憶を客観視して思いたす。

× × ×

「使ってよ？」

一戸、使いかけの赤絵具をバッグから出す。

一戸、バッグから薬箱を落とす。

「これ、なんだよ」

「片頭痛でさ」

一戸、急いで新田の手から薬箱を取る。

× × ×

「……………な、なあ」

「いやだ、ごめんな」

一戸 (小声) 新田は強いな……………」

× × ×

「いいじゃん。今度やろうぜ、部活前とか」

「……………」

一戸、思い悩み顔が陰る。

× × ×

新田 「おまえにそんな悩みを打ち明けられるとはな
あ。一つ言えるのが俺はいつもスランプだつてこ
と」

一戸 「そっか……よかった。頑張れよ」

一戸、少し物寂し気な表情で見送る。

× × ×

一戸 「はあ、怖いよ」

一戸、声を震わせながら湖を眺める。

一戸、バッグから菓箱を取り出す。

一戸 「終わりたくない。なあ新田……」

一戸、新田に電話を掛ける。

× × ×

新田 「いい加減にしてくれ……。お前に『死にたい』
なんて言われた気持ちがかかるか、分からないか
ら好き勝手言ってるんだろ。もう勝手にどこ
にでも行けよ」

× × ×

一戸、ワンコールで電話を切る。

一戸 (小声) でも、生きてたくはないよお」

一戸、ベンチに座ってうずくまる。

19.

【学校美術室(晴)】昼内

新田、絵を描き終わる。

新田、一戸の手提げバッグを一戸の椅子に立
てかける。

新田 「お前はそこにいるんだろ。分かっているよ」

新田、美術室を出る。

新田

「頑張るよ、俺」

新田、目を潤わせる。

誰も居ない美術室、桑の花の絵と桑の赤い実がなっている木の絵が置かれている。

20.

【畑横の歩道（晴）】昼外

新田、家の扉を開きバッグを掲げ歩く。

新田（N）

「夏が終わり、秋を通り過ぎて新しい一年が始まり一戸は遠い所へ行ってしまった。結局、好きな飲み物も好きな色も知らないまま」

× × ×

蝉の鳴き声が窓の外で鳴る。

新田の部屋、ラジカセからラジオが流れている。

ラジオMC

「さあ、やってまいりました。本日も多数のリスナーの皆様からお便り頂きました。本日のテーマは「後悔」、僕は最近、近くの中学校で講演させて頂いたんですけど、税金がどうか給料がどうかね、夢のないことばかり語っちゃって。もっと学生にはね、たくさん楽しいこと話してあげられたんじゃないかってね。まあそんなところで読んでいきましょう。ペンネームはクワタさん。『友達が引越してしまいました。もしかしたらもう会えないかもしれません。最後になにか声をかけたかったです、自分の心が小さくてうまく声をかけられませんでした。どうしたらよかったですか』とのことです……そうですね、きっと君は変わるうとしているんだから弱いままじゃないし、どうしたらいいかなんて人それぞれだと思ふなあ。でも僕だったら『ま

(終わり)

た明日』なんてキザなこと言うなあ。そんな関係性の友達が居たらってはなしなんだけど。はい、クワタさん素敵なお便りありがとうございます。さてさて次のお便り読んでいきましょう……」